

保育におけるコンサルテーション —統合保育における巡回指導について—

中西 由 里*

On Itinerant Consultation of Nursery School

Yuri NAKANISHI

1. コンサルテーションとは

保育におけるコンサルテーションについて考える前に、コンサルテーションという用語の定義についてみていこう。

コンサルテーション (consultation) という用語は「相談」と訳される一般名詞である。臨床心理学関係の業務の中では主に次の二つの意味で使われている。一つめは、日常業務の中で行き詰まった者が当該領域の先輩や上司にその業務に関する意見を請う場合であり、同業者の間で、より専門的な知識と経験のある先輩に対して求められる教育的かわりのことを意味する。二つめは、地域援助におけるコンサルテーションのことであり、コミュニティの中で「専門的職業人（コンサルティ）が、その専門業務の中で『こころ』の課題に直面し、『こころ』に関する専門職（コンサルタント）に相談すること」を意味する。つまり、専門を異にする社会人同士の、対等で自由な関係の中で行われ、地域社会への介入方法の一つとされている（鵜飼, 2004）。また、コンサルテーションの目的としては、コンサルティが自らの専門的な職業上の困難を克服し、そのことを通して専門家として成長していくこととされている。

コンサルテーションの内容についてキャプラン（Caplan, G. 1970／鵜飼 2004による）は以下の4種に分けている。①クライアント中心の事例コンサルテーション（クライアントに対する心理査定と見通しを立て、コンサルティがクライアントの状態の改善を促進できるように援助する）、②コンサルティ中心の事例コンサルテーション（コンサルタントが、事例に接する上での困難に直面したコンサルティを援助する）、③対策中心の管理的コンサルテーション（複数のクライアントのためのプログラムを効率的に計画・実行することを援助する）、④コンサルティ中心の管理的コンサルテーション（効果的なプログラム実施の支障となっているコンサルティ組織の問題を明確に、援助組織の機能を改善することを目指す）

保育場で、巡回相談や巡回指導という形態でおこなわれている「保育コンサルテーション」はキャプランの分類によると概ね①と②の内容であるといえるだろう。

*心理学科 教授

2. 保育におけるコンサルテーション

保育におけるカウンセリングとコンサルテーションの相違について、保育場面におけるコンサルテーションについて長年実践を重ね、研究を続けている浜谷（2002）は以下のように論じている。

カウンセリングにおいては、こころの専門家としてのカウンセラーの専門性は重視されているが、相談をする側（相談者）の専門性については想定されていない。相談者は自らを助けてもらうためにカウンセラーに支援を求めていると考えられている。一方で、コンサルテーションにおいては、コンサルティである保育者は保育の専門家として位置づけられている。保育者は困難な事態の解決に積極的に取り組んでいる専門家であり、コンサルタントである巡回指導担当者は、保育者が保育上の困難を解決し、保育を改善することを支援する役割を担っているのである。

そこで浜谷（2002）は、保育コンサルテーションについて次のように定義をしている。

保育におけるコンサルテーションは、子どもに対する間接的な支援である。つまり、保育を支援する発達臨床コンサルテーションとは、「発達臨床の専門家と保育の専門家の対等で自由な協同的な問題解決であり、その目的は、保育者の保育機能を改善することによって、子どもの状態を改善することにある」のである。また、その枠組みについては図1に示した。

コンサルタント（相談員） ← 依頼 ← コンサルティ（保育者） → 処遇
→ クライアント（子ども）

コンサルタント（相談員） → コンサルテーション → コンサルティ（保育者）

図1 間接的な支援の枠組み（浜谷，2002による）

浜谷（2002）はコンサルテーションのプロセスについて次のようにまとめている。まずアセスメントを行い、次にコンサルタントからコンサルティにアセスメントの結果について伝達をする。続いて助言の提示及び話し合いが行われる。助言や話し合いを踏まえての実際の介入はコンサルティである保育者によって行われる。介入の実際についてコンサルタントが立ち会うことは少ないので、一定の介入後に介入の妥当性について分析やアセスメントを行うことも重要である。

浜谷（2002）が指摘している、保育者から期待されている支援についてや保育コンサルテーションの実際については表1、表2に示しておいた。それ以外の保育コンサルテーションについての理論的枠組みについての詳細については浜谷の原著を参考にされたい。

表1 保育者から期待されている支援について（浜谷，2002による）

保育実践への支援
保育者間の組織化への支援
保育者と保護者の協力への支援
保育者と専門機関との連携への支援
行政への要求への支援
保育者の力量形成への支援
保育者の心理的安定への支援

表2 保育コンサルテーションの原則（浜谷，2002による）

-
- | |
|--|
| ・子どもはだれもが発達する可能性と権利がある。 |
| ・保育者は子どもの発達が実現する状態をつくることに取り組むとともに、子どもの発達する権利を侵害・阻害するような状態を改善することに取り組まなければならない。 |
| ・適切で科学的な方法で、子どもの発達の状態を評価することができる。 |
| ・保育には、子どもの発達を十全に実現できる状態から、発達を著しく阻害する状態まであり、適切で科学的な方法で保育の状態を評価することができる。 |
-

3. 保育場面におけるアセスメントの実際

続いて、筆者が行っている子どもの発達状態や保育場面のアセスメントの実際について述べることにする。心理アセスメント（査定）については、クライアントに対する心理的な処遇や対応を考えるための基礎的な資料や情報を収集することや、クライアントをよりよく理解ことを目的とするものと定義されている。これにならうと保育場面におけるアセスメント については、保育者へのコンサルテーションを行うために必要な基礎的な資料を得たり情報を収集することを目的とするものと定義できるであろう。

保育場面でのアセスメントには、保育内容に関するもの（保育環境に関すること）と対象となっている子どもや子どもの家族、保育者や保育者間のことなどのアセスメントが含まれている。

保育場面でのアセスメントのポイントについて、及び子どもの発達をアセスメントする際の主な発達指標を整理したものを表3，4に載せておいた。表3は筆者が保育コンサルテーションを行うために訪れた保育園で、実際に保育場면을観察する際のポイントについて整理したものである。②の子どもの行動観察については多様な保育場면을想定して列挙してるので、実際の行動観察は短い場合、10～15分であることもある。実際の観察にあたっては、表中の項目から適宜ポイントを選んでいることを補足しておく。

また、子どもの発達レベルを把握する際に役立つであろう主な発達指標について整理したものが表4である。もちろん、詳細に子どもの発達レベルをアセスメントする際には発達検査等の心理検査を用いるべきであろう。検査の中でも、DAM（グッドイナフ人物画知能検査／小林，1977）に関する知識を有しておく、あくまでも参考資料という限定付きではあるが、子どもの描画からおおよその知的レベルを把握することができるであろう。

表3 保育場面でのアセスメントのポイント（筆者による）

① 現状（現在保育者が困っていること・困難感）の把握
入園前の生育歴（病歴、療育歴・家族歴等）の情報による把握（発達の経過の確認）
入園後の変化（変わったこと・変わらなかったこと）及び現在困っていることや症状の変遷
家庭および園で現在までに取られた対応とそれに対する反応など
②当該の子どもの行動の観察
・保育場面での観察（自由遊び、設定保育、散歩等の園外、給食、おやつ、トイレ、午睡等）
・登園時・帰園時、保護者との分離場面、担任不在時の様子等
・集団行動や個別に対応している場面での観察
・症状や問題行動の出現状況
・親子分離時の様子・再会時の様子など
・身辺自立の様子
・大人（担任／他クラスの保育者／フリーの保育者／園長／他児の保護者等）との関わり場面
・コンサルタント（子どもからすれば「見知らぬ見学者」）との関わり
・他の子どもとの関わり場面（同年齢／より年上／より年下／乳児等）
・物（玩具・遊具）との関わり
・その他
・子どもの作品（図画、工作、折り紙等）
・保育記録
・連絡ノート（保護者と担任との）
③家庭環境や保育場面以外での子どもの様子

表4の発達指標と3～4ヶ月のズレ、特に発達の遅れがある場合は、個性の範囲と捉えることも可能であるが、6ヶ月以上のズレ（発達の遅れ）がある場合は、発達の障害がある可能性も想定されるので、専門機関等でアセスメントをしてもらった方がよいであろう。

また、子どもの発達を把握するには、発達のズレだけではなく、発達のバランスについてもよくチェックしておく必要がある。

子どもの状態像の把握のためには、先述の「発達のズレ」ばかりではなく、表5の各項目（言語、対人関係、感情・情緒、行動）のバランスをよく把握することも重要である。次に「発達のバランス」の大まかな目安について触れておく。

目安として、「知的障害（精神発達遅滞）」が想定される場合は、全体発達の遅れであり、発達のバランスは比較的よいであろう。一方、「自閉性障害、LD、ADHD」などの発達障害が想定される場合は、発達のバランスが悪いことが多い。発達障害の中でもどの障害に該当するかという点については、バランスの悪さの内容（デコボコがある）についてより詳細に丁寧なみていくことが必要であろう。デコボコのあり方が障害によって異なっているのである。

子どもの見立てにおいても一つ重要な観点がある。それは、現在呈している様態が、一次的な発達障害であるのか、それとも二次的な情緒障害であるのか、それとも障害を想定する必要のない、個性の範囲であるのかを見極めることである。

この一次的な障害であるのか、それとも、二次的な障害であるのかのアセスメントは、その後の助言や介入を考えるために見逃すことのできないポイントである。これは働きかけ（介入）における変化、つまり変わりやすい部分と変わりにくい部分にも繋がることである。

表4 乳幼児期の発達指標（発達のレベルや発達年齢のアセスメント）（筆者による）

【微細運動（手の運動）－縦から横へ・「動く」から「止まる」へ－】

- 1歳前 : 指さし（人差し指1本を伸ばす）
- 1歳3ヶ月頃 : 積み木を縦に重ねる
- 1歳7ヶ月頃 : ぐるぐるまるをかく
- 2歳前 : ジャンケンのチョコキの指（人差し指と中指を伸ばす）
- 2歳頃 : 積み木を横に並べる
- 2歳半頃 : （まねて）縦の線を引く
まねて○をかく（○が閉じる／動きのコントロール）
- 3歳頃 : 顔の絵をかく（○に目と口／大きさのコントロール）
三本指（人差し指、中指、薬指を伸ばす）
- 3歳半頃 : 十字をかく（縦と横の線をかく）

【粗大運動（全身運動）】

- 1歳前後 : 歩く
- 1歳半頃 : 走る
- 2歳頃 : ボールを蹴る／両足跳び
- 3歳頃 : 片足立ち
- 3歳半頃 : でんぐりがえし／幅跳び
- 4歳過ぎ : ブランコの立ちのり

【言語・理解】

- 1歳過ぎ : 言葉を2,3語使い始める
- 1歳半頃 : 目、口、耳、手、足などを指示する
- 2歳頃 : 二語文を話す
- 2歳半頃 : 自分の姓名を言う／大きい小さいがわかる
- 3歳頃 : 同年齢の子とも会話ができる／色の理解（赤、青、黄、緑など）
- 3歳半頃 : 3までの数の理解
- 4歳頃 : 5までの数の理解
- 5歳頃 : 左右の理解
- 就学前 : 日本語に含まれるほとんど全ての音が発音可能となる

【身辺自立】

- 6ヶ月頃 : ビスケットなどを手で持って食べる
- 11ヶ月頃 : コップを自分で持って飲む／スプーンで食べようとする
- 1歳3ヶ月頃 : 自分の口元をひとりで拭こうとする
- 2歳頃 : 排尿を予告する／一人でパンツを脱ぐ
- 2歳5ヶ月頃 : こぼさないで一人で食べる
- 3歳前 : 上着を一人で脱ぐ
- 4歳前 : 入浴時ある程度自分で体を洗う
- 5歳前 : 一人で着衣ができる

表5 発達バランスの見立てのポイント（筆者による）

【言語】
理解言語と表出言語のバランス／言語発達の遅れの有無／病理言語の有無／構音／ 言語に表れる情緒的問題（吃音など） 等
【対人関係】
子ども自身から大人への働きかけ／大人からの働きかけに対する反応／子ども同士の関係ややりとりの 様子
【感情・情緒面】
感情表出の分化・豊かさ・固さなど／感情のコントロールー了解可能であり状況にあっているのかどう か／共感性（対人的共感性・他者の感情の理解のあり方・相互交渉の持ち方）／関係やつながりが持て ているという感じ（疎通性）
【行動面】
活動の自発性／活動量（多動・寡動）／機敏性など／活動の目的性／自己コントロール／興味・関心の ありかた 等
病理行動（こだわりの強さ／パニックの有無／極端な興味の限局／関心の狭さ 等）

4. 保育コンサルテーションの実際ーあるいは巡回指導の実際

保育コンサルテーションの実際について述べる前に、筆者が保育場面とどのように関わってきたのかについて簡単に記すことにする。筆者は約30年にわたり、A市の統合保育（障害児保育）の巡回指導に関わってきている。また、民間の保育園に併設されている「子育て支援センター」をサポートしてきている。また、巡回指導を通じて懇意になった民間の保育園の依頼で、不定期であるが、職員の研修や園内で全職員が参加して行われるの事例検討会のアドバイザーも引き受けている。

1) A市の統合保育巡回指導制度について

次に、A市の統合保育の巡回指導制度について簡単に紹介しておこう。

障害児の保育所における保育について、1978年より本格的な取り組みが開始されてきた。それに伴い、臨床心理学、障害児教育、児童精神医学などの専門家が保育園に出向いて保育者の相談にのったり、保護者の相談にのったりするという巡回指導制度が導入された。また、保育者のための研修も併行して行われている（成田 他, 1989）。

そうした取り組みが進められる中、当初の「障害児保育」から「統合保育」へと視点の転換が行われるようになった。「障害児保育」という制度では、障害児が保育経験を受けることにより、成長・発達をするという障害児側だけの視点であったが、「統合保育」との観点から取り組みが見直されることにより、障害児だけではなく、定型発達児にとっても障害をもった子どもと交流することによって成長・発達につながるという視点へと変化することとなった。

つまり、「統合保育」という概念の導入により、障害児、定型発達児、保育者、障害児の保護者、定型発達児の保護者等保育に関与している全ての人が成長・発達するという視点へと変換する

ことになったのである。

2) 巡回指導（コンサルテーション）実践の例

次に筆者の実践経験から巡回指導実践について例をあげて紹介することとする。

まず、統合保育の巡回指導（コンサルテーション）の枠組みについて再度確認しておくことにする。筆者の考えについては表6に示した。

表6 統合保育における巡回指導（コンサルテーション）の基本的な枠組み（筆者による）

①保育の専門家である保育者との連携・共同作業である。
②実際に実践するのは保育者である。 ・誰か（どこか）にだけ負荷がかかる状況にならないように配慮すること。
③ある程度長期的な見通しも必要である。 また、クラス運営は4月から翌年3月まで1年間続くという認識も必要である。 短期間ではなく、長丁場であるので無理なく継続できる取り組みを支援すること。
④一方で、短期間で変化が見込める状況について、具体的、積極的な介入を助言・援助すること。
⑤巡回指導員（コンサルタント）の関わりは年に2～3回である。 常時関わっているわけではないので、保育者が負荷を感じることなく、継続して行うことができる（保育者が疲れ果てたり、頑張りすぎて体調を崩したりすることのない）実践を援助・助言することが重要である。

以下に、筆者の実践例から具体的なコンサルテーションや支援内容について簡単に記していくことにする。

①保育者への支援の例

a) 概要：障害児が含まれるクラスに加配がつかずに、担任一人で、理想の保育をしようと頑張っていた事例である。

助言：無理をすると日常の保育として続かなくなるので、年間の見通しを立てて保育計画をたてるようにすることを助言した。また、子どもの変化も、短期間での変化を期待せずに、長い目でみるのが大切である。

園の体制への助言：園の体制として支援可能なできる時間帯をなるべく定め、フリーの保育士や主任がサポートに入るように助言した。

所感：頑張りすぎる保育者をセーブするような働きかけは園内からは生じにくく、園外の、すなわち外部からの視点であろう。障害児への支援を『個人の頑張り』に任せてしまうと、組織全体の力とはなにくいので、組織としてどう取り組むのかと考えることも園の管理者にとっては重要なことである。また、組織として、取り組むことにより、保育園の職員それぞれの保育力の向上にも繋がっていくと考えられる。

b) 障害児を常勤の保育者とパート保育者で担当する事例

概要：障害児の受け入れに伴い加配の保育者がつく場合が多いが、加配措置が恒常的でない場合は常勤職員ではなく、加配がパート職員であることが多い。そのような場合、保育者向けの研修に参加しているのは常勤職、実際に当該の子どもに関わっているのは(研修の機会のない)パート保育士ということが、(公立保育園の場合に)よくありうる。

助言：実際に障害児の対応している職員も研修(それに近い機会)を受けることができるように工夫をしてみるように配慮し、また職員間で情報や知識も共有できるように工夫をするように助言した。

c) 保育者の立てた個別の保育計画についての助言例

助言：障害特有の苦手さの部分を克服したり、伸ばそうとする目標を設定することがありがちである。その「苦手さ」については、長い期間でのゆるやかな変化という視点でみていくことを提案した。その一方で得意な部分は年齢相応とは関係なく、早めであっても伸ばしていくとよい。また、苦手な部分(過敏な部分)を創意工夫で軽減できるのならば、そういう対応や配慮をしてやることを助言した。具体例については中西(2007)も参考にされたい。

さらに、子どもの成長・発達の変化を長期的な視点でみていくことも重要である。そのためには、短期的な目標を設定し、その達成状況について適切にアセスメントを行い、次の目標を定めたり、目標の微調整、再調整等を行っていくとよい。

子どもの出来ないことを探すよりも、出来ることを一つずつ増やしていくつもりで対応した方がよい。特に保護者の中には、「出来ないこと」に注意を向けがちなので、保育者が保護者の視点に寄り添いつつ、変換していくような日常的な働きかけも重要である。

d) 「保育しやすい子ども」の事例

概要：親子分離に際しても特に抵抗を示さず、新しい保育者や保育園という環境にも慣れやすく、身辺自立に関しても特に手がかかることもなく、給食もよく食べるという、保育者の手を煩わせることが少ない、いわゆる「保育しやすい子ども」が園児の中に存在する。その大部分はいわゆるトマスとチェス(1981)のいう気質として「育てやすい子」であることが多いが、中には、養育者との愛着が弱く、対人的にも対物的にも執着が少なく、行動面でも多動でないが、特定の人との関係が成立しにくいという周囲の手を煩わせることの少ない、発達上の問題を持っている子どもが含まれていることがある。特に一時保育という形態での保育の場合に、隠されている発達上の心配が見過されがちである。

助言：保育者が「保育しやすい(困難や苦勞、配慮の必要を感じない)子ども」の持つ問題についても目を向け、個別にじっくりと関わる機会を設定し、その子どもに発達上気がかりな点がないのかどうかを確認しておくように助言した。

保育場面にすぐに慣れ、保育者が交代しても特に反応を示すことが少ない子どもであったが、保育者が意識的に個別に関わってみると、言葉の発達や会話のやりとりが年齢よりも遅めであると気づいた事例があった。保育者が個別の働きかけを意識的に行うことにより言葉のやりとりや概念発達が進んだ事例もあった。

②保育園の組織への支援の実例

a) 概要：ベテラン保育者と新人が組んで担任をする場合にベテランの要求水準が高く，新人がついて行けずに，体調を崩した事例。

助言：新人保育士を育てる視点の再認識を園全体で行うことを助言した。

b) 概要：ベテラン女性保育士と若手男性保育士が組んで，乳児の担任をしていた事例。

ベテラン保育士からみると男性保育士が，たとえば乳児の泣き声によって，要求の違いを聞き分けることができない等のことで，気が利かないようにみえてしまっていた。

助言：当該の園では，従来，全ての年齢（0歳～5歳）の担任を経験して一人前という前提があった。管理職に，男性保育士に求める役割について，検討してもらった（資格を取り立ての未婚の男性保育士が0歳児の保育にあたる意味は？）。従来は女性が多かった保育現場に男性保育士が進出するようになってきているという背景をもとに従来のやり方や方針の再検討を管理職に依頼をした。

③保護者への支援

a) 障害児の保護者の場合

概要：障害の受容については，様々であり，すぐに受け入れることができる保護者もいれば，入園のために渋々（障害児保育の対象である）との書類を書いたという人までいる。

加配の保育士がついていることについても「個別対応までしてもらえて」と喜ぶ人も，「うちの子は『特別』ではない」と拒否的になる人まで多様である。

助言：理解不足の保護者に対しては，個別の保育参観で同年齢の他児の様子を見てもらうことが筆者の経験上は効果があった。

b) 定型発達児の保護者の場合

概要：障害児も定型発達児も共に育ち合うことに思いを巡らすことができる保護者と，「あの子に手がかかるため自分の子どもが不利益を被っている」と園に訴える保護者までこちらも多様である。

助言：不満を訴える保護者には，個別に，時間を区切って（30～50分程度／長くても1時間半を超えないように／長引く場合にはその部屋へ電話を入れてもらうように予め体は手配をしておく）話を聞くことも一つの手。☆（カウンセリングの枠組みの応用）

5. 終わりに

以上，筆者が行っている「統合保育」における巡回指導という形態でのコンサルテーションの実践について，主に保育場面のアセスメントのポイントや子どもの行動観察の際の視点を示した。またそれをもとにコンサルテーションの実践例について，①保育者への支援，②保育園の組織への支援，③保護者への支援について事例を紹介した。

文献

- 浜谷直人 2002 「保育におけるコンサルテーションとは何か」(東京発達相談研究会・浜谷直人編著『保育を支援する発達臨床コンサルテーション』, ミネルヴァ書房)
- 小林重雄 1977 グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック, 三京書房。
- 中西由里 2007 「軽度発達障害の子どもへの対応—困難さを軽減するためのいくつかの工夫」, 梶山臨床心理学研究, 7, P23-26。
- 成田錠一 他 編・著(名古屋市障害児保育指導委員会 編・著) 1989 「障害児保育のあり方を求めて—名古屋市障害児保育10年の歩み—」 名古屋市民生局保育課発行。
- Caplan, G. 1970 The theory of practice of mental health consultation. New York : Basic Books. (鵜飼美昭, 「臨床心理学大事典」 培風館, 2004, より)
- トマス, A.D. & チェス, S. 1981 林 雅次 監訳 「子供の気質と心理的発達」, 星和書店 (Thomas, A.D. & Chess, S. The Dynamics of Psychological Development, Brunner / Mazel, 1980.)
- 鵜飼美昭 2004 「コンサルテーション技術」(氏原寛・亀口憲治・成田義弘・東山紘久・山中康裕 編) 「心理臨床大事典」, p1139-1140, 培風館)